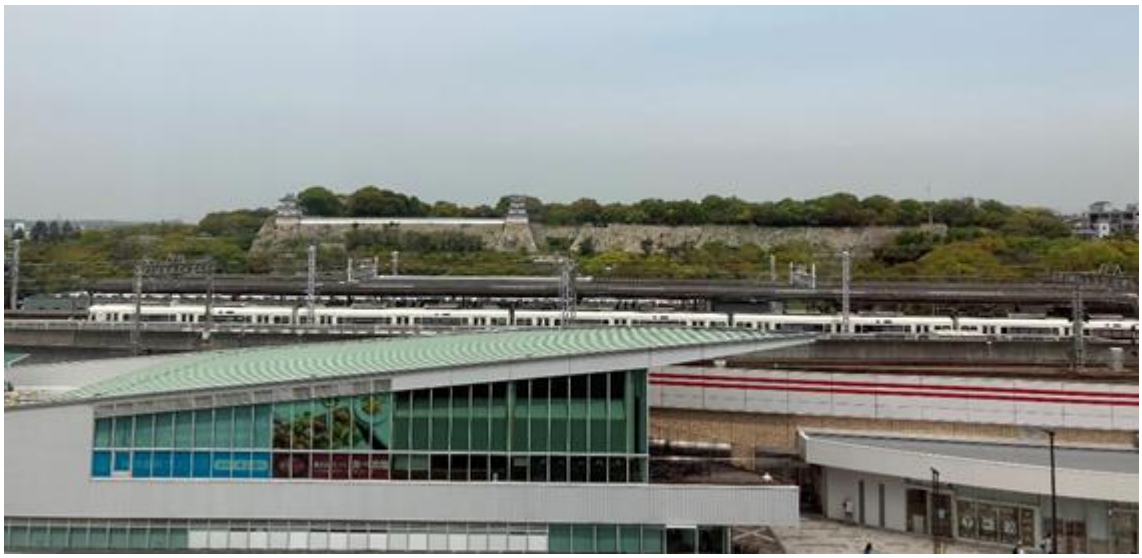
明石の史跡（１０）吉川広家と明石

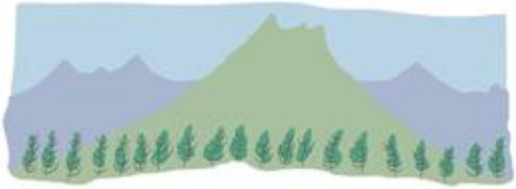


慶長５年（１６００）６月１８日、家康は会津（上杉氏）討伐のため伏見城を出発。当時、佐和山城（滋賀県彦根市）に蟄居していた石田三成は、好機到来と考え、家康追討を計画。７月１２日には、三成は佐和山城にて、大谷吉継・安国寺恵瓊らと会談し、挙兵を決定。

一方毛利氏は、吉川広家と安国寺恵瓊をして家康東征に従軍させた（吉川広家自筆覚書案）。大坂で恵瓊と合流するために、広家は７月５日、出雲富田城を出発。佐和山での会談後、大坂にまいもどった恵瓊は、広家のもとへ急使を派遣する。同１３日、明石で東上する広家に出会う（吉川広家自筆書状）。恵瓊の使者から、家康打倒の計画を知らされ、衝撃をうける。

姫路からは山陽道（西国街道）を進んできた広家、一方、西下する恵瓊の使者、両者が出会ったとされるのは、明石のどの地点なのか。中世における明石（狭義）は、東の朝霧川から西は明石川、北は伊川、南は海の範囲が考えられる。山陽道での接点を考慮すれば、朝霧川から明石川のある地点。勝手な想像が許されるならば、大蔵谷の宿か、あるいは人丸山（現明石城）の麓か、景勝の地での出来事だけに、広家の驚きは大きかったのであろう。

その日は明石で宿泊したものと考えられ、翌１４日、大坂に急行した広家は、その夜、恵瓊と激論を交わすことになる。要するに輝元が、家康と戦わねばならない理由がないということを、繰り返す広家。たいする恵瓊は、自分の主張が認められなければ切腹を、という。議論は平行線をたどる。１４日付けで、広家は輝元が三成らの計画にはまったく預かり知らぬことを、榊原康政に知らせる。結果的には、これが毛利家を救うことになる。



日本歴史学会会員 茨木 一成